

早わかり

高麗郡入門

若光ってどんな人?

渡来人はどこから
開発をはじめたの?

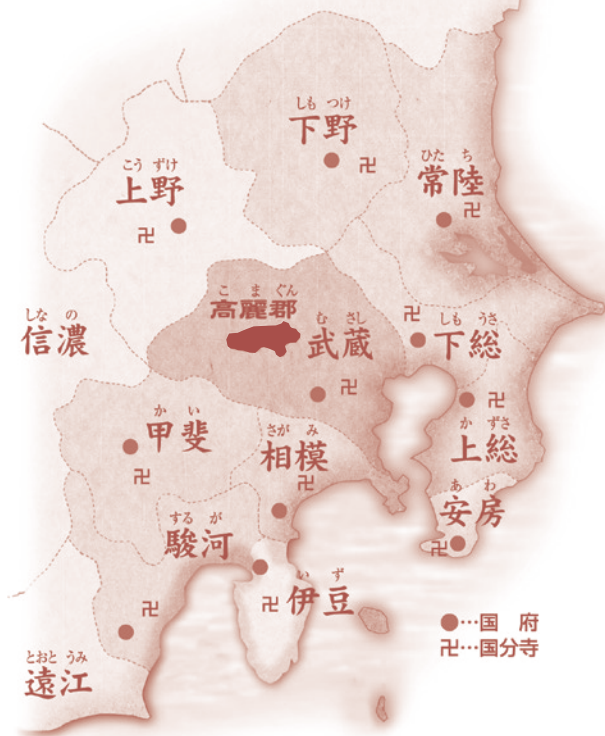
朝鮮通信使って、なーに?

Q&A

渡来人ってどんな人?

高麗郡はどのくらい
広がったの?

高句麗(高麗)って
どんな国?



『早わかり高麗郡入門Q&A』 刊行にあたって ……平成25年11月吉日

平成28年にこの地に高麗郡が置かれてから1300年を迎えます。

市では、高麗郡建郡1300年を記念した様々なイベントを実施するとともに、これを機会として、多くの皆様にこの地に訪れていただき、渡来文化と歴史観光をお楽しみいただきたいと考えております。

さて、高麗郡につきましては、明治29年に入間郡に編入されて以来、石碑などにその名を留めつつも、人々の記憶から遠くなってまいりました。

しかし、建郡1300年を迎えるにあたり、改めて高麗郡について、その生い立ちと私たちに続く歴史を知り、光り輝く未来へとその記憶をつなげていきたいと考えております。

その中で、高麗郡とは何かという基本的なことが誰にでも分かるよう『早わかり高麗郡入門Q&A』と銘打って本書が刊行され、とても喜んでおります。

ご尽力いただきました高麗浪漫学会の皆様へ厚くお礼申し上げます。

本書が、高麗郡を知る上での、最良のガイドブックとして多くの皆様に活用されるよう願っております。

高麗郡建郡1300年記念事業日高市実行委員会 会長

日高市長 谷ヶ崎 照雄

本年9月8日に高麗浪漫学会が誕生いたしました。この日は2020年の東京オリンピックの開催が決定したという記念すべき日と重なりました。

ところで、高麗浪漫学会は高麗郡建郡1300年を記念事業のひとつとして設立されました。会則の第2条には「本会は高麗郡及び関連地域に関する総合的な研究を通して、より良い地域社会の構築に寄与することを目的とする」とあります。つまり、建郡1300年事業終了後も、高麗郡を中心とした地域の研究や渡来文化の研究を通し、地域社会の発展・国際交流に貢献しようとするものです。

そうしたなかで、「高麗郡が建郡されたのはわかるが、なぜこの地だったの?」とか、「高麗王若光や高麗福信ってどんな人?」といったさまざまな疑問を良く耳にします。実は、素朴な疑問に答えるのが一番むずかしいのですが、本会の諸氏にこうした素朴な疑問に答えてもらったのが本書です。

本書が、さらに高麗郡を知るよりよい機会になれば幸いです。

高麗浪漫学会

会長 高橋 一夫

目次

『早わかり高麗郡入門Q&A』刊行にあたって	1	17 高麗郡の役所はどこにあったの	24
目次	2	18 女影廃寺は高麗郡家の付属寺院か	25
00 なぜ今、高麗郡か	4	19 高岡廃寺は高麗氏の仏教指導者・僧勝楽の菩提寺か	26
6世紀初め頃の朝鮮半島	5	20 大寺廃寺は高麗氏の氏寺か	27
古代高麗郡史跡地図	6	21 どうして3つもの寺院を造営できたの	28
01 渡来人ってどんな人	8	22 高岡窯跡で焼かれた瓦はどこで使われたの	29
02 渡来文化って、なーに	9	23 移住者のむら堂ノ根遺跡	30
03 高句麗(高麗)ってどんな国	10	24 渡来人はどこから開発をはじめたの	31
04 高句麗の「広開土王」ってどんな人	11	25 渡来人は、税金をどうなったの	32
05 百済と日本の関係は	12	26 渡来人が関わった郡は他にもあるの	33
06 新羅と日本の関係は	13	27 本当に常陸や相模などから移り住んだの	34
07 若光ってどういう人	14	28 高麗郡の人はどんな生活をしていたの	35
08 どうして若光は日本へ来たの	15	29 高麗神社はいつ頃できて、何を祭っているの	36
09 若光の従五位下とはどのくらい偉いの	16	30 聖天院ってどんな寺	37
10 福信ってどんな人	17	31 代表的な渡来人の姓はなに	38
11 郡の役割って、なーに	18	32 高麗氏系図って、なーに	39
12 高麗郡が建郡された時期はどのようにわかるの	19	33 高麗氏一族で活躍した人は	40
13 高麗郡が建郡される前に人は住んでいたの	20	34 朝鮮通信使って、なーに	41
14 高麗郡はどのくらい広がったの	21	35 どうして明治に高麗郡はなくなったの	42
15 入間郡の範囲は	22	高麗郡関係略年表	43
16 どうしてこの地に高麗郡が建郡されたの	23	執筆者紹介／項目担当者 奥付	44

00

なぜ今、高麗郡か

今、高麗郡が注目されています。それは2016年に建郡1300年を迎えることにもよりますが、これに加え学際的に高麗郡の歴史を研究しようとする動きが高まっているからです。

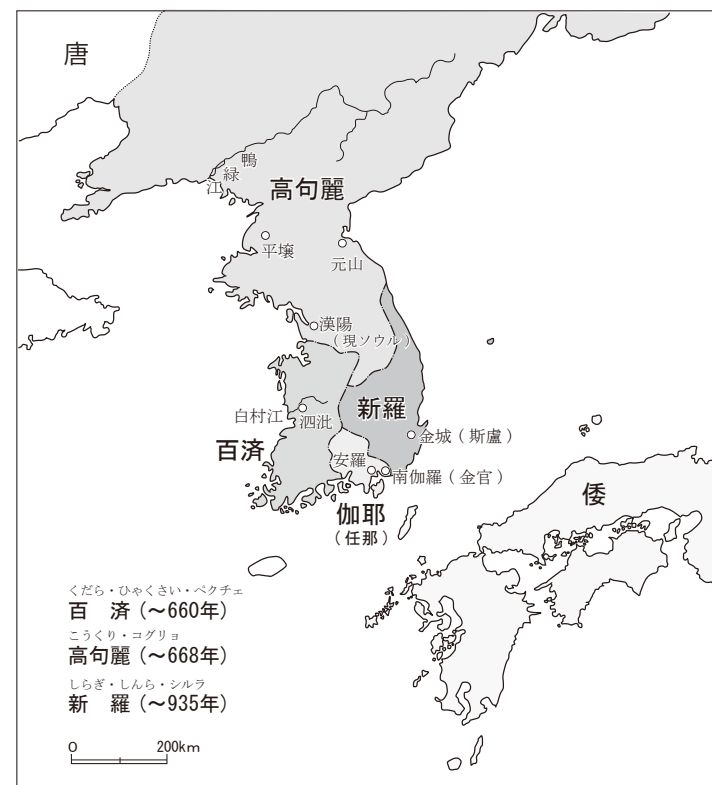
実は、これまで高麗郡について深く研究されたことはありませんでした。例えば、『しよくにほんぎ統日本紀』には靈龜2年(716年)に東国7か国に住む高麗人ひと1799人を武蔵国に移住させて高麗郡を建郡したとあります。しかし、なぜ日高市を中心とした地が選ばれたのか、なぜ東国各地に住んでいた高麗人をこの地に再配置したのか、移住当初の移住者たちにどのような支援体制がとられていたのか等々、解明されていない問題が多々あります。

高麗郡建郡からおよそ40年後の天平宝字2年(758年)に、新羅僧32人、尼2人、男19人、女21人を現在の新座市に移住させ、新羅郡が建郡されましたが、高麗郡とは相違して僧を中心に移住させています。また、高麗郡では建郡直後から3寺院が造営されますが、新羅郡ではそうした動きは見られません。同じ渡来人を中心とした郡でありながら、その発展に大きな相違が見られます。こうした両郡を比較検討することによって、当時の政府の朝鮮半島からの渡来人政策、ひいては高麗郡建郡の意図を明らかにできると考えられます。

ところで、弥生時代以降わが国は、朝鮮半島から稲作をはじめ、先端の知識・技術・文物を積極的に吸収し、平安時代以降はそれらを消化・発展させ独自の社会・文化の形成に努めてきました。再度、明治には最新の西欧文化を積極的に吸収し、国際社会から取り残されるのを回避しました。

律令国家成り立ちは明治の状況と類似しており、当時の国際関係のなかでの渡来人政策について、高麗郡はそれを具体的に検証できる数少ない事例といえます。建郡1300年を契機として、渡来文化を未来につなげるため、今こそ高麗郡を知ろうではありませんか。

図1 6世紀初め頃の朝鮮半島



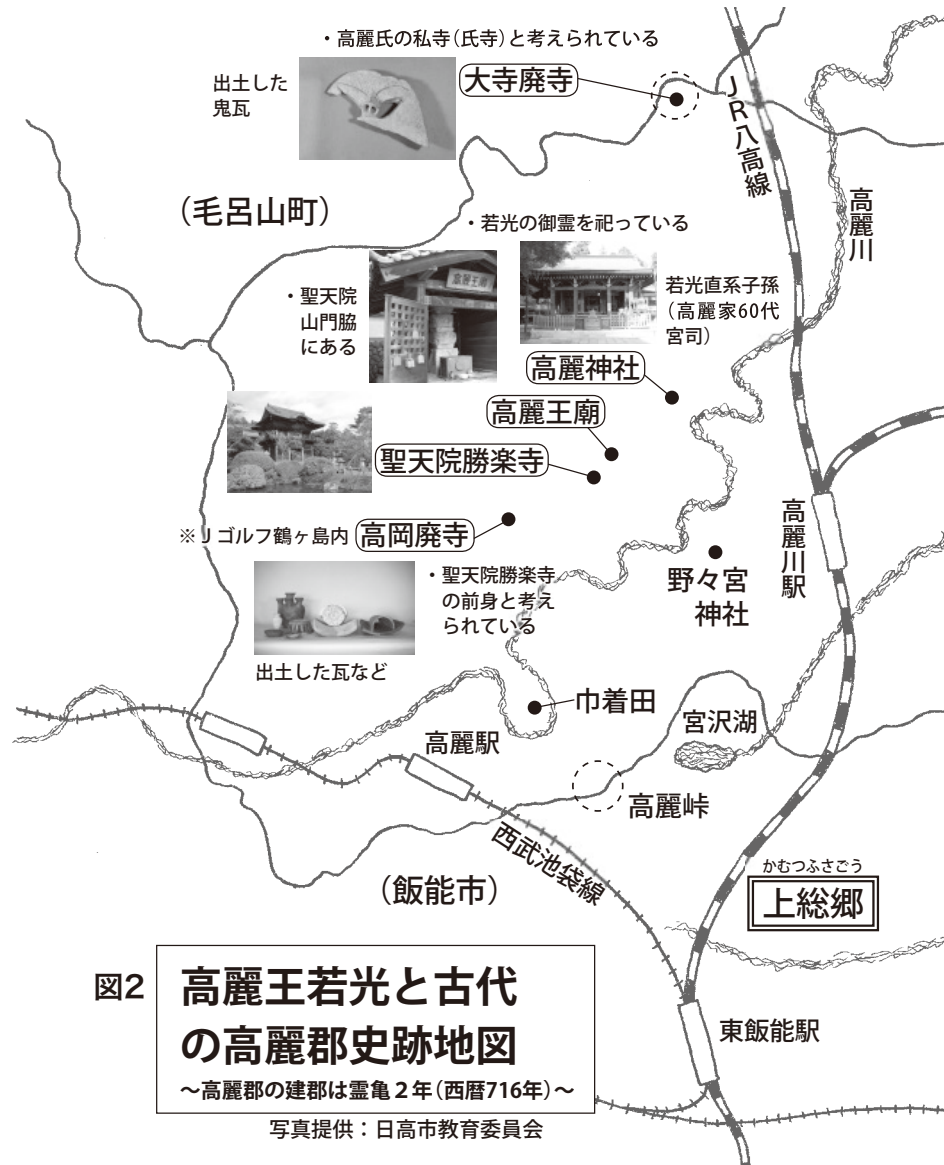
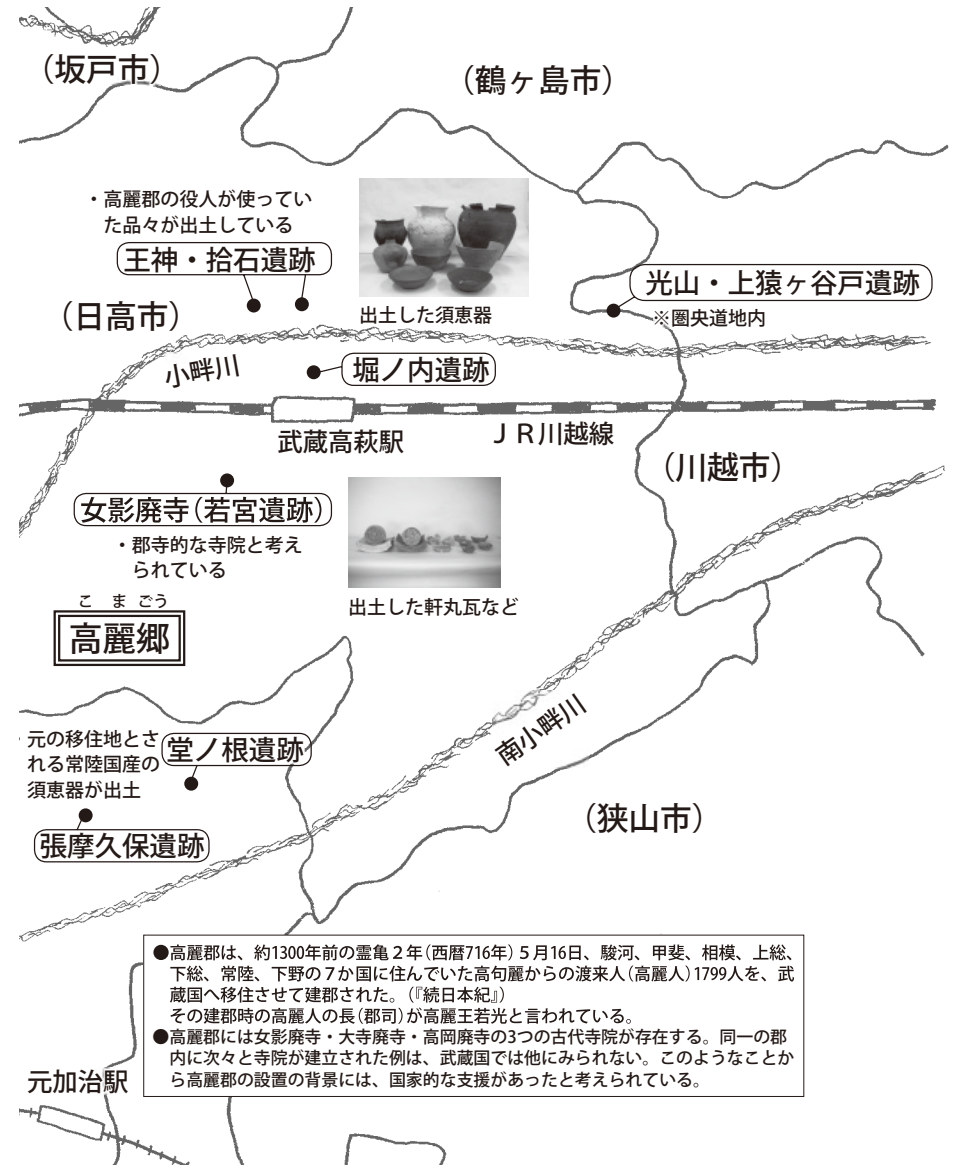


図2

高麗王若光と古代の高麗郡史跡地図

～高麗郡の建郡は霊亀2年(西暦716年)～

写真提供：日高市教育委員会



●高麗郡は、約1300年前の霊亀2年(西暦716年)5月16日、駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の7か国に住んでいた高句麗からの渡来人(高麗人)1799人を、武蔵国へ移住させて建郡された。(『続日本紀』) その建郡時の高麗人の長(郡司)が高麗王若光と言われている。

●高麗郡には女影廃寺・大寺廃寺・高岡廃寺の3つの古代寺院が存在する。同一の郡内に次々と寺院が建立された例は、武蔵国では他にみられない。このようなことから高麗郡の設置の背景には、国家的な支援があったと考えられている。

01

渡来人ってどんな人

渡来人とは、海外から渡来してわが国に住みついた人たちを、その子孫を含めていう歴史用語です。

約1万年前、氷河期が終わり温暖化すると海面が上昇し、日本列島は大陸から分離しました。この時以来、日本列島に渡来する者がいて稲作を伝えたりしましたが、大和朝廷による統一国家形成の段階に入ると、渡来して大小の氏族集団を形成した人びとが先住の氏族集団と区別して意識されるようになりました。このため、4世紀から7世紀頃に中国大陸及び朝鮮半島から日本に移住した人たちを渡来人と呼びます。

大陸や半島で戦乱や飢饉等の混乱が起こると、それを避けて日本列島に渡って来た人たちが増えました。4世紀末から5世紀初め、西文氏の祖の王仁、秦氏の祖の弓月君、東漢氏の祖の阿知使主等の渡来伝説があります。彼らは文筆・記録・徴税・外交等の分野で活躍し、絹織物生産など先進技術も伝えました。

5世紀後半からは中国南朝文化を身につけた百済や加耶諸国の人びとや、「倭の五王」の通交にもなって少数の中国人が渡来してきました。6世紀中頃以降、高句麗との関係が好転すると、中国北朝文化を身につけた高句麗人の渡来も見られるようになりました。この時期の渡来人は蘇我氏によって編成され、彼らのもたらした高度な政治統治技術や仏教等の文化は、中央集権的な国家制度の確立に役立てられました。

天智2年(663年)の白村江の敗戦により百済が完全に滅亡すると、百済の王族・貴族を含む百済人が日本に亡命しましたが、その数は4000~5000人以上だったと考えられています。天智7年(668年)に滅びた高句麗からも王族を含むかなりの数の亡命者がありました。彼らは、天智朝~持統朝の朝廷で、律令制度の整備や中央集権体制の確立に大きく貢献し、中国の先進文化も伝えました。

02

渡来文化って、なにに

原始・古代の時期に、朝鮮半島や中国等から伝来した文化を渡来文化といいますが、ここでは古墳時代以降に焦点をあてます。

4世紀後半の高句麗王広開土王碑の碑文には、倭(日本)が高句麗と交戦したことが記されています。高句麗騎馬軍団との戦いは、乗馬の風習がなかった倭人たちに騎馬技術を学ばせ、5世紀になると日本の古墳にも馬具が盛んに副葬されるようになります。これは騎馬の風習が定着したことを物語っています。

朝鮮半島や中国との交渉のなかで、横穴式石室やカマドの採用、鉄器・須恵器の生産、機織工芸・土木等のさまざまな技術が、主として朝鮮半島から渡来人によって伝えられました。ヤマト政権は、彼らを韓鍛冶部・陶作部・錦織部・鞍作部等と呼ばれる技術者集団に組織し、各地に居住させました。また、漢字の使用もはじまり、ヤマト政権の様々な記録や外交文書等の作成に史部と呼ばれる渡来人があたりました。6世紀には、百済から渡来した五経博士により、儒教が、さらに同国からは仏教が伝えられ、その後の日本の思想形成に大きな影響をおよぼしました。

7世紀になると強大になった中国との交渉が再開され、日本からは遣隋使・遣唐使が派遣され、東アジアの新たな動向に応じた中央集権国家体制の導入をめざしました。また、貴族や地方寺院を中心に広められた文化は飛鳥・白鳳文化と呼ばれ、仏教寺院や仏教美術等の仏教文化を中心とするものでした。奈良の飛鳥寺・百済大寺・法隆寺・川原寺・薬師寺等はこの時代を代表する寺院で、百済・高句麗・新羅、さらに中国の南北朝時代の仏教文化の影響を多く受けています。

このように、古代の日本は渡来文化を積極的に受容し、国家としての仕組みや思想を整えてきたといえるのです。

03 高句麗(高麗)ってどんな国

高句麗は、紀元前2世紀頃から668年まで朝鮮半島の北部に存在した国です。北は中国と接し、南は百済と新羅に接していました。朝鮮三国の中では高句麗がもっとも早く王国を樹立しました。始祖は朱蒙(東明聖王)という人物で、卵から生まれたという伝説があります。都は209年から427年までは丸都城におかれ、427年以降は平壤におかれました。

「高句麗」という国名は、日本の歴史書である『日本書紀』には見えず、高麗郡や高麗神社の「高麗」と記されています。また、狛犬の「狛」と表記されることもあります。高句麗のことを最初に記した歴史書は、中国の『漢書』という書物で、そこには「高句麗県」とあって、紀元前1世紀頃の高句麗は中国(前漢)の支配下にありました。紀元後9年頃に中国の支配が解かれ、後漢の時代には独立した国として存在したようです。

高句麗と倭(日本)との国交は、5世紀末までにはすでにあったと考えられ、推古天皇の時代になると、仏教を通じた交流が盛んとなります。推古3年(595年)には聖徳太子の仏教の師とされる高句麗僧の慧慈が日本にやって来ます。推古13年(605年)には高句麗王から黄金300両が贈られ、元興寺(飛鳥寺)の仏像の造立に使用されました。また、紙や墨の製造技術も推古18年(610年)に高句麗僧の曇徴が伝えたものとされています。

古代朝鮮半島では、高句麗・百済・新羅の三国が覇権を争って何度も衝突をくり返していました。さらに、高句麗は中国とも国境を接していたため、常に中国の脅威にさらされていたのです。例えば、598年には隋に攻められ、644年には唐に攻められています。後者は642年に淵蓋蘇文(泉蓋蘇文)という高官が榮留王を殺害し、宝蔵王を擁立するという高句麗の内紛に唐がつけ込んだものです。このような状況のもと、まず660年に百済が滅亡します。そして、ついに668年には高句麗が、唐と新羅の連合軍に攻められ、滅亡してしまうのです。

04 高句麗の「広開土王」ってどんな人

『三国史記』(朝鮮三国の歴史書)によると、広開土王の本名は「談徳」といい、生まれながらにして雄偉であったとされます。389年に皇太子となり、392年に父王が亡くなったため高句麗王に即位しました。広開土王の没年は412年です。

「広開土王」(好太王)の称は、高句麗19代目の王の諡号(おくりな・故人に贈る称号)で、広開土王碑(好太王碑)に「国岡上広開土境平安好太王」と記されていることから、これの略称ということになります。また、「永楽」という年号を立てたことから「永楽太王」とも呼ばれました。

広開土王碑は、中国吉林省集安県にある石碑で、広開土王の遺体を山陵に葬る時(414年)に、広開土王の息子である長寿王によって建てられたものです。1880年頃に近くの農民によって発見されました。高句麗の国域はおおよそ現在の北朝鮮に相当しますが、石碑が中国にあることによって、広開土王の時代には高句麗の領土がそこまで及んでいたことがわかります。

広開土王は、高句麗の領土を広げようとして、395年頃から中国の燕と激しい戦いをくり返しています。しかし、成果は上がらず、逆に燕に攻められていくつかの城(領土)を失っています。一方、朝鮮半島南部、すなわち百済への侵攻は功を奏したようで、396年には百済の都城(漢城)を陥落させ、百済に加担していた倭(日本)軍を退けました。さらに410年には、高句麗の始祖朱蒙の生誕地とされる東扶余(中国東部の松花江流域)を征服しました。つまり広開土王は、高句麗の領土を広げ開いた偉大な王だったのです。



図3 広開土王碑

05 百済と日本の関係は

倭人は紀元前1世紀頃から朝鮮半島を経由して中国に外交使節を派遣しましたが、百済とも交渉していたと思われます。

『日本書紀』に引用された『百済記』には、367年に倭国(日本)と百済は国交を開いたとあります。百済の阿莘王(あしん)6年(397年)5月に太子腆支(てんし)を人質として差し出したという『三国史記』の記事が倭国・百済関係に関する朝鮮側最古の記録です。

高句麗の『広開土王碑文』では、4世紀末、倭が百済や新羅を破り、「臣民」としたという記事があります。高句麗への服属を強いられていた百済は、王子を人質に出すことで倭国と修好して高句麗に対抗したのです。369年に百済から贈られた七支刀が奈良の石上神宮に伝えられていますが、高句麗との戦闘における倭国の軍事的援助への返礼と考えられています。

6世紀になると百済は加耶地方に進出し、加耶諸国や新羅と対立します。百済は、隋・唐と修好したり、倭国の軍事支援を得たりして勢力を拡大しました。皇極2年(643年)、新羅が唐に救援を求めると百済・高句麗は連携して対抗しました。

舒明3年(631年)から倭国で人質として過ごしていた王子豊璋(ほうしょう)は、斉明6年(660年)に百済が滅亡すると、祖国の復興をはかる鬼室福信(きむつ)らの助力により、翌年、百済王として帰国しました。天智2年(663年)、白村江(はくそんこう)の敗戦により百済が完全に滅亡すると、百済の王族・貴族を含む多くの百済人が倭国に亡命し、一部が朝廷に仕えました。豊璋の弟・善光(ぜんこう) (禪広)の子孫は朝廷から百済王の姓を賜りました。

平成12年(2001年)、今上天皇(きんじょう)は百済系の和氏(やまと)出身の高野新笠(たかののにいがさ)が桓武天皇(かんむ)を出産していることに触れ、「韓国とのゆかりを感じている」と発言されました。

06 新羅と日本の関係は

古代の朝鮮半島は小国が分立していましたが、4世紀になると、半島東南部の辰韓(しんかん)地域を新羅が、半島南西部の馬韓(ばかん)地域を百済が統一しました。一方、南部の弁韓(べんかん)地域は統一が進まず、鉄を産出するこの地域をめぐる、この後数百年にわたって倭や半島の諸勢力が争いました。

こうした中で、新羅と百済、そして紀元前1世紀に半島北部の鴨緑江(おうりょくこう)周辺に興った高句麗(こうくわ)の三国は、中国や倭国をも巻き込みつつ、戦争をくり広げました。最終的に新羅は唐との同盟に成功し、唐・新羅の連合軍によって斉明6年(660年)に百済を滅ぼしました。日本は朝鮮半島の三国のうち、特に百済と親密な関係にあったため、百済の再興をかかげて天智2年(663年)に白村江の戦いに臨みましたが、唐・新羅連合軍のまえに敗れ、さらに天智7年(668年)には高句麗が滅亡したため、日本は唐と新羅の両国を敵にまわす形になってしまいました。

日本は両国の侵攻に備え、防衛体制を整備していきましたが、実際にはその後、百済や高句麗の元の領土の支配をめぐる、新羅と唐が争いました。そのため、両国と日本が戦争をすることはなく、逆に新羅は日本を敵にまわすまいとして、日本に対して下手に出る外交を行いました。日本にとってそれは、百済が滅亡してしまったことで維持できなくなった日本が他国よりも上位であると考えた価値観(小中華意識)を満足させるものでした。しばらくはそのような形で日本と新羅の外交関係は続きましたが、8世紀前半に唐と新羅の関係が改善すると、一転して新羅は日本に対して、日本を上位とする関係を続けることを拒否するようになりました。新羅もまた小中華意識を抱いていたのです。これによって、しばしば外交上のトラブルが生じるようになり、ついには宝亀10年(779年)を最後に公的な外交使節のやり取りは終りを迎えました。

しかしその後も、新羅や中国の商人が日本・新羅・中国の間を盛んに行き来したため、経済的な交流は承平5年(935年)に新羅が滅亡するまで活発に続けられました。

07

若光ってどういう人

若光は高句麗から日本へ来た渡来人です。『日本書紀』天智天皇の5年(666年)10月条に、来日した高句麗の使者の1人として「二位玄武若光」とあり、二位は第二副使、玄武は官位あるいは部族名であろうといわれていますが、詳しいことはわかりません。

若光が来日して二年後、高句麗は唐・新羅によって滅ぼされました。その後、『続日本紀』大宝3年(703年)4月条に、従五位下高麗若光に王姓を賜り高麗王若光とするという記事があります。つまり、若光は来日後、高句麗情勢の変化もあって日本に留まり、日本の官人として出仕していたこととなります。

若光は、武蔵国高麗郡の高麗神社(埼玉県日高市)の主祭神として祀られます。『高麗氏系図』には、若光の死に際して「従って来た貴賤相集い、屍を城外に埋め、靈廟を建てて、高麗明神と崇めた」とあり、これが高麗神社のはじまりです。高麗郡は東国各地に広がっていた高麗人を集めて霊龜2年(716年)に新設された郡ですが、若光を始祖とする高麗氏は、高麗人の移住に際して指導的な役割を果たした家柄だったのでしょう。若光の没年は不明ですが、『系図』はその長子家重の死を天平20年(748年)としていますから、高麗郡の建郡後ほどなくのようです。

ところで、神奈川県大磯町高麗山に、神仏分離以前は高麗神社(高麗権現社)と呼ばれていた高来神社たかくじんじやがあります。社伝に高麗からの渡来伝承を持ちますが、別に、大磯の峰に渡来したのは「高麗大神和光」とする伝承もあります(箱根山縁起ほか)。そして、この「高麗大神和光」は「若光」のことだともいわれています。あくまでも伝承ですが、背景に、相模国では大磯の地に高麗人が渡来していた史実があるのでしょうか。そして、武蔵国高麗郡以外の地でも伝承されていることは、若光が高句麗系渡来人の拠り所となる人物であったことを物語ります。



図4 高来神社と高麗山
撮影 東真江

08

どうして若光は日本へ来たの

若光は天智5年(666年)10月に、高句麗が遣わした使節の副使として日本へ来ました。高句麗からの使者は前年の正月にも来ていて、その使者が6月に帰国したばかりであったにもかかわらず、なぜ10月にまた若光らが日本へ派遣されなければならなかったのでしょうか。

7世紀は朝鮮半島の三国(高句麗・新羅・百済)の抗争の世紀で、そこに唐が絡んで常に戦闘状態にありました。特に高句麗はたびたび唐からの攻撃を受けていましたが、高句麗の実権を握る淵蓋蘇文よんげそむん(泉蓋蘇文せんがいそぶん)が防御に努めていました。しかし、天智4年(665年)に彼が死去すると、その後継者争いから国内政治が混乱、それに乗じて唐は高句麗に侵攻し、天智7年(668年)に高句麗は滅びます。若光が日本へ遣わされたのは、ちょうど高句麗の内政が混乱している時で、唐からの圧力もすでにあったと推測されます。日本へのたびたびの使者は、日本の援助を求めたものだったのでしょう。

これまでも朝鮮半島の諸国は、窮地の時には、日本に援軍を頼みに来ていました。高句麗と結んだ百済の侵攻に苦しめられた新羅は、大化3年(647年)、金春秋を遣わして支援を要請しました。

百済も斉明6年(660年)に唐と新羅に滅ぼされたとき、残存勢力が使者を日本に送って援軍を要請し、日本はそれに応えて出兵しましたが、天智2年(663年)に白村江の戦いで敗れました。

この時、斉明天皇は詔で「兵を要請して救援を請うことは過去にもあったと聞いています。危機を助け、断絶しようとしているものを絶えないように援助することは、当然の道理です」といっています。このような日本の姿勢に、高句麗も援軍を求めたのかもしれませんが、百済救援に惨敗し、疲弊しきった日本は高句麗の要請には応えられなかったのでしょうか。

09 若光の従五位下とは どのくらい偉いの

『続日本紀』によれば、高麗氏の始祖とされる若光は、大宝3年(703年)に「高麗王」という姓を授かった際に、「従五位下」でした。では、この「従五位下」とはどれくらい偉いのでしょうか。

律令制では、少初位下から正一位までの30段階の位階が定められていました。このうち、従五位下より上の位階を持つ人が「貴族」とされ、さらに従三位より上が「公卿」と呼ばれました。

それぞれの位階には、それに応じた官職が決められていました。だいたい、公卿は大臣クラス、貴族は各省の長官クラスです。従五位下だと、上国という比較的大きな国の守(それぞれの国に派遣された国司の中の最上位者)になることができました。

貴族になると様々な特権が与えられ、位田(位に応じて支給される田)等の経済的特権のほか、調や庸などの税が免除され、さらに刑罰も一部減免・免除されました。また、出世においても優位な立場にありました。蔭位の制といって、貴族の子や公卿の孫は21歳になると自動的に一定の位階を与えられました。通常の官人は、低い位から6年に1度、少しずつ位階が上がっていったため、真面目に長く勤めてもなかなか貴族になることはできませんでしたが、一方、貴族以上の子孫は蔭位の制により最初から高い位からスタートすることができたのです。これにより、律令制以前からの上級貴族層が再生産され、それ以後も国政の中樞を担い続けることになりました。

以上のように、貴族とそれより下の官人では待遇に大きな違いがありましたが、こうした特権を有する貴族以上の人は、8世紀初めの時点では百数十人程しかいなかったと考えられています。従五位下は貴族の一員であるので、若光は律令制下でかなり偉い立場にあったといえるでしょう。

10 福信ってどんな人

福信は高倉朝臣福信(709~789年)という奈良時代の高官です。『続日本紀』掲載の伝記によると、福信は武蔵国高麗郡の人で、もとの姓は肖奈公と言いました。高句麗が唐・新羅の連合軍に滅ぼされた天智7年(668年)の前後に日本に渡来した福徳の孫とありますから、福信自身は日本生まれの高麗人です。

若い頃、伯父である肖奈公行文中に連れられて平城京に上り、相撲の上手さを認められて内裏に召されると、その後は順調に昇進していきました。聖武天皇の信頼も篤く、天平19年(747年)には肖奈王の姓を賜り、さらに天平勝宝2年(750年)には「高麗朝臣」の姓を賜ります。わずか2年数ヶ月後の高麗朝臣への改姓は、福信がそれ以後たびたび対外使節に任命されたことと関係があるといわれています。高麗という国号を冠する朝臣とすることで、日本王権の臣下になっている高麗王族出身者がいることを対外的に示せるからです。宝亀10年(779年)、福信は一族の祖が日本に「帰化」してから長い年月がたったにもかかわらず高麗の号が冠されているので、高倉朝臣と改めたいと願い出て、高倉朝臣福信となりました。

福信は、藤原仲麻呂政権下では、仲麻呂の副官的な役割をなし、仲麻呂の雲行きが怪しくなると反仲麻呂派に転じ、次の道鏡政権下では、法王宮職の長官の地位につくなど、世渡りの上手さがうかがわれます。しかし、こうして身を処せたのは、何よりも官人として才能があったからです。延暦4年(785年)に辞職を願い出ていますが、この時77歳でした。いかに、重用されていたかがわかります。

注目すべきは、武蔵国の国守に3回任じられていることです。出身国への影響力の強さが考慮されたのでしょうか。

81歳で死去した時、福信は三位という高位でした。渡来人として、また地方出身者として高位高官に上り、優遇された数少ない人物です。

11

郡の役割って、なにに

律令国家が中央集権的に全国を支配するためには、中央の官制とは別に、地方を支配する仕組みを整備することが必要でした。まず、全国を畿内・七道に区分し、さらに国・郡・里(のち、郷に改められる)がおかれ、それぞれに国司・郡司・里長が任じられました。高麗郡は、現在の東京都と埼玉県からなる武蔵国のなかに設置された郡で、さらに高麗郷(現在の日高市のあたり)と上総郷(現在の飯能市のあたり)に分かれていました。

国司には中央の貴族が任じられ、国の行政の中心である国府に赴任しました。国司はそれぞれの国における天皇の代理人とされ、天皇の徳が地方に行き渡り、統治が貫徹されるように努めなければなりません。そのため国府には、天皇の権力を示すために立派な国庁(庁舎)がつくられ、そこではその地方の人びとが天皇に服属していることを象徴する様々な儀式が行われました。また、正倉と呼ばれる倉庫が並び、地方の財源とされた租が集められるなど、財政上の機能も有していました。その他、国府の周辺には国分寺・国分尼寺も建設されました。

国司の職掌は多分に理念的なものでしたが、実際に地方を支配するためには、郡司の力を借りる必要がありました。郡司には在地の豪族が任じられ、郡内の民政や裁判を司り、彼らは地元の人びとに対して直接的な支配を行っていました。特産物の生産は郡司の指導の下で行われ、さらには税の徴収なども郡司を通して行われました。

このように、在地の豪族を郡司という官職につけ、中央から派遣した国司が彼等を監督するという形で律令制の枠組みに取り込み、在地の豪族を通して地方の支配を行ったのです。

高麗郡の場合も、渡来系氏族である高麗氏を郡司に任命し、この地域の実質的な支配を任せて、各地から移配した渡来人たちを指導させながら郡内の開発を進めていったと考えられます。

12

高麗郡が建郡された時期はどうしてわかるの

平成28年(2016年)は、靈龜2年(716年)に武蔵国高麗郡が建郡されてから1300年目に当たります。高麗郡の建郡は、『統日本紀』(『日本書紀』に続く六国史の2番目)の靈龜2年5月辛卯(16日)条に次のような記事があることからわかります。「駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て、武蔵国に遷し、高麗郡を置く」(原文は漢文)。この記事からは、今の静岡県東部、山梨県、神奈川県、千葉県、茨城県、栃木県に、すでに高麗人(高句麗人)が広く居住していて、それらの人びとが武蔵国の1か所に集められたこともわかります。

中国大陸や朝鮮半島からの渡来人は、弥生時代をはじめとして、応神・仁徳朝の頃とされる5世紀前後、雄略朝を中心とする5世紀後半から6世紀前半、白村江の戦いを中心とした7世紀の朝鮮三国(高句麗、新羅、百濟)の抗争期の4期に最も多かったとされています。長い間に渡来した人びとが日本全国に広がっていたことは容易に想像できますが、具体的にその居住地がわかるのは7世紀の渡来人です。

『日本書紀』には、天智4年(665年)から持統4年(690年)のわずか25年ほどの間に、渡来人の居住地がわかる記事が13か所あります。そしてそれらの地は、近江国以外は駿河国、武蔵国、常陸国、甲斐国、下野国で、いずれも靈龜2年に高麗郡建郡のために集められた高麗人がいた国々です。もちろん、7世紀の渡来人は高麗人ばかりではなく、『日本書紀』に居住地がみえる渡来人のうち、高麗人は常陸国に安置された一例のみで、そのほかは唐人、百濟人、新羅人です。しかし、東国と一括される国々とその隣国の駿河、甲斐、このあたりが渡来人を意識的に置いた地域であり、当然、そこには高麗人もいたのでしょう。そうした地域にいた高麗人の一部が、靈龜2年、1か所に集められて高麗郡がつくられたのです。高麗郡は高麗郷と上総郷の二郷からなっているので、上総国からの移住が最も多かったと推測できます。

13 高麗郡が建郡される前に人は住んでいたの

日高市・飯能市を中心とする範囲が古代高麗郡と考えられています。この地域の遺跡を見ていくと、旧石器時代のナイフ形石器、尖頭器、細石刃等が出土しており、旧石器時代から人びとが生活していたことがわかります。

また、縄文時代になると草創期から早期にかけて遺跡が徐々に増えはじめ、中期になると遺跡数が増加し、丘陵・台地と生活の場が大きく広がり、大規模な集落も出現するようになります。後期、晩期は遺跡数が激減し、集落の規模も小さくなっていきます。縄文時代の遺跡は時期によって増減しますが、この地域で継続して長期に生活していたことがわかります。

しかし、弥生時代から高麗建郡までの間は、古墳時代の遺跡がわずかに見つかるだけで、人びとが生活した痕跡はほとんど確認されていないのです。つまり、稲作には適さない土地だったため、弥生時代以降は人の住まない空白地帯となりました。奈良時代、高麗郡が建郡されたことにより、この地の歴史が再び動き出したのです。

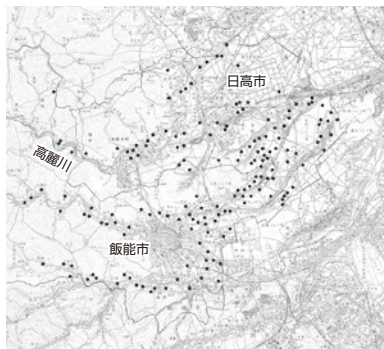


図5 縄文時代主な遺跡分布



図6 古墳時代の主な遺跡分布

14 高麗郡はどのくらい広がったの

「霊亀2年(716年)以前には人が住んでおらず、716年以降に集落が始まった地域」＝「高麗郡の人びとが新たに開拓した地域」と考えると、それはほぼ現在の日高市・飯能市にあたります。下の遺跡分布図の○部分で、この地域では霊亀2年(716年)頃を境にして遺跡がいつせいはじまります。狭山市の大字広瀬周辺(入間川北岸)もこの条件に合っていますが、この地域は9世紀後半には入間郡に属していたことが文字資料からわかっています。

10世紀前半の書物『和名類聚抄』によると、高麗郡は「高麗郷」・「上総郷」の二つの郷で構成された小さい郡でした。高麗丘陵の北側(高麗川駅周辺から高萩にかけて)と、南側(飯能市精明地区)の遺跡群が、建郡当初の高麗郡の主要地域だったと考えられます。

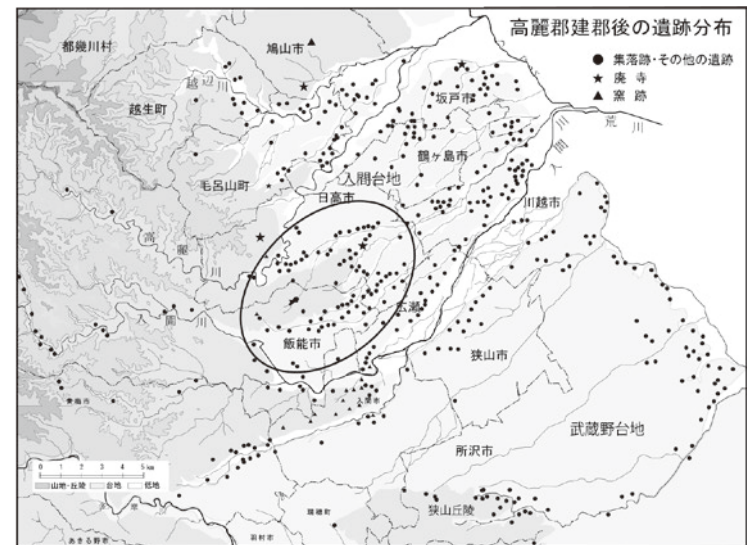


図7 奈良・平安時代の遺跡分布

15 入間郡の範囲は

高麗郡建郡より前の遺跡分布を見てみましょう。古墳(地域の支配者の墓)がある地域は、高麗郡建郡以前にすでに開発されていた場所なので、入間郡の範囲を考える参考となります。

そのほとんどは広い水田に面した台地の端に分布し、特に坂戸市の北側に非常に多くの古墳が集中しています。奈良時代に継続する遺跡も多く、入間郡の中心地だったことがわかります。また、7世紀末には塔を備えた大きな寺(勝呂廃寺)がつくられ、前代、坂戸周辺に古墳を築いた支配者層の一族が建立に関わったと考えられます。

入間郡は郡家・大家・麻羽・高階・山田・安刀・広瀬・余戸の8郷で構成されていました。このうち坂戸市浅羽・狭山市広瀬の地名は今も残っています。一方、川越市霞ヶ関遺跡(東武東上線霞ヶ関駅周辺)が、入間郡の役所が置かれた郡家郷にあたと推定されています。

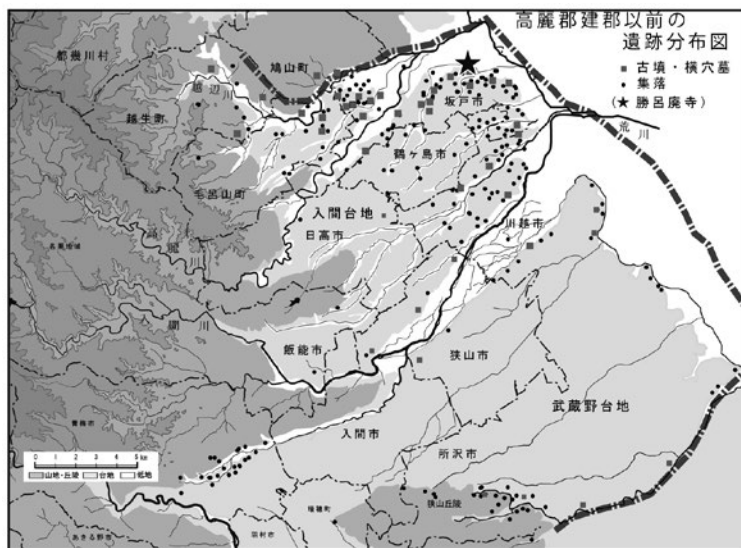


図8 古墳時代の遺跡分布(高麗郡建郡以前)

16 どうしてこの地に高麗郡が建郡されたの

考古学では地域の歴史を知るために、どの時代の遺跡がどこに存在するのかを把握するために遺跡分布調査を実施します。分布調査の結果、日高市内では第1に縄文時代の遺跡は数多いが、弥生時代の遺跡は皆無で、古墳時代の遺跡はほとんど存在しないこと、第2に奈良時代になると再び遺跡が出現し、急増することが判明しました。飯能市でも同様の現象を示しています。

日高市を中心とする地域に、奈良時代に遺跡が出現する原因として、この時代になってやっと水田開発が行われるようになったことが考えられます。実際に小河川沿いに水田開発が進められていった様子が明らかになりつつあります。しかし、遺跡出現の最大の理由として、高麗郡の建郡による人の移住があげられます。

霊亀2年(716年)に関東の7か国に居住していた高麗人1799人を、日高市を中心とする地域に移住させて高麗郡を建郡しました。なぜ、この地に高麗郡が設置されたのでしょうか。そのキーワードは「無人の地」です。無人の地には在地豪族や住人といった既存勢力が不在のため、移住する高麗人との間に問題は生じません。

またこの頃、朝廷は中央集権国家をめざし、郡などの地方行政機構の整備に力を注いでいた時期でもあります。無人の地には誰の抵抗もなく、郡家(郡の役所)のモデルを描くことができます。女影廃寺の瓦は、常陸国新治郡家の付属寺院(郡寺)と考えられる新治廃寺の瓦と同じ木型でつくられています。その後、女影廃寺の瓦をモデルとした瓦がつくられ、県内主要な郡寺の屋根を飾りました。実は、こうした現象を示す瓦は女影廃寺の瓦だけなのです。

日高市を中心とした地域に高麗郡が建郡されたのは、関東諸国の高麗人を開発のために1か所に移住させる目的とともに、地方行政機構のモデルを示すという、もうひとつ重要な使命があったのです。

17 高麗郡の役所は どこにあったの

日高市と飯能市では、高麗郡の郡庁院、正倉(倉庫)群等の役所(郡家)の関連施設は、まだ見つかっていません。しかし、郡の役人が住んでいたと思われる場所が、発掘調査によって明らかになりつつあります。

それは武蔵高萩駅の北側に存在する拾石遺跡と堀ノ内遺跡で、青銅製の丸鞆、巡方等の帯具が出土しています。丸鞆は半円形、巡方は正方形で、銅や石で作られたベルトに付ける装身具で、材質により役人の位を表していました。その他に、箸置きとして用いられた耳皿、役所で不要となった文書を漆容器の蓋紙に使用したため漆が付着した漆紙が出土しています。文書を書く紙は役所にとって不可欠なもので、当然、筆と硯も必要です。

拾石遺跡の西に位置する王神遺跡からは、鳥形硯片が見つかっています。鳥形硯は平城京を中心とする畿内での出土が主で、関東では日高市と武蔵国の役所(国府)があった府中市で出土するぐらいで、とても珍しいものです。中央との深い結びつきがうかがえる資料といえます。

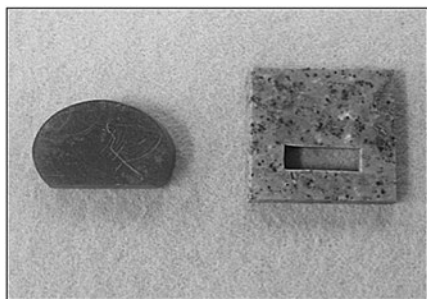


図9 丸鞆(左)、巡方(右)



図10 鳥形硯

18 女影廃寺は高麗郡家の 付属寺院か

女影廃寺は川越線の武蔵高萩駅近くにあります。そこから軒丸瓦の周縁部に面違鋸歯文をめぐらした複弁8葉蓮華文の軒先瓦が出土しています。その年代は8世紀初頭で、女影廃寺の創建年代を示しています。この瓦は、670年頃に天皇家がはじめて造営した奈良の川原寺の瓦を祖形とするものです。7世紀末創建の下野薬師寺の瓦は、川原寺瓦をモデルにした瓦で東国で最初につくられました。なお当時、下野薬師寺は東国で最も格式に高い寺でした。その後、下野薬師寺の瓦をモデルにして、常陸国新治郡家の付属寺院(郡寺)である新治廃寺の瓦がつくられました。

女影廃寺の瓦は新治廃寺の瓦と同じ木の型で作られているので、新治廃寺の瓦づくりが終了した8世紀初頭に木型が高麗郡に移動し、女影廃寺の瓦づくりがはじまったのです。つまり、『日本書紀』高麗郡建郡の記事と合致します。

ところで、女影廃寺の軒丸瓦は埼玉県では唯一系譜を追える由緒正しい瓦なのです。そのためか、この瓦をモデルに二つの木型がつけられました。一つは面違鋸歯文が交差山形文(A類)に、もう一つは交差波状文(B類)に変化したもので、これらは女影廃寺系瓦と呼ばれています。

A類・B類の女影廃寺系瓦は、県内各地の郡寺と想定されている寺院跡から出土しています。なかでもA類の木型は、痛んだ木型を改修し長期間使用されました。女影廃寺は創建瓦の年代、この瓦が県内の瓦に影響を与えた大きさから、女影廃寺は高麗郡の郡寺と考えられています。



図11

川原寺



女影廃寺

19 高岡廃寺は高麗氏の仏教指導者・僧勝楽の菩提寺か

高岡廃寺はゴルフ場造成に伴い、昭和51年(1976年)発掘が行われました。その結果、山の斜面を造成した上段の平坦面で、礎石をもつ5間×4間(10m×8m)の建物が確認されました。基壇の正面は石組で整えられおり、建物の規模から本尊を安置した金堂が想定されています。また、下段の平坦面では小規模な仏堂や僧房、カマド等が検出されました。下段は上段を造成する際に出た粉碎された岩石等を埋めて平坦面を造成していました。その造成の様子を調べるため、トレンチ(試掘溝)を入れて掘り下げていくと、造成土の中からほぼ完全な形をした土師器はじきという素焼きの土器(坏)が出土した。土器の年代は8世紀中頃です。この土器が出土したことにより、高岡廃寺は8世紀中頃に造営が開始されたことがわかりました。

ところで、高麗氏系図には天平勝宝3年(751年)に僧・勝楽が亡くなり、勝楽寺を創建すると記されています。発掘調査によって得られた高岡廃寺の創建年代と勝楽寺の創建年代が一致することから、高岡廃寺は高麗氏一族の仏教の師である僧・勝楽の菩提寺だった勝楽寺の可能性が高まったのです。

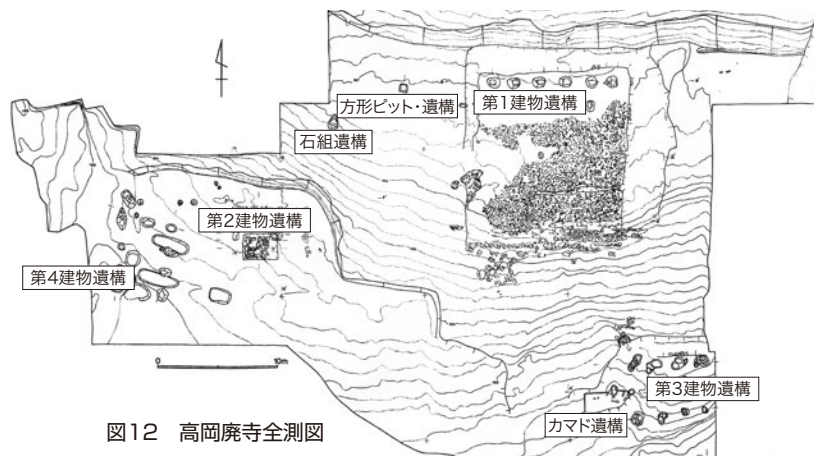


図12 高岡廃寺全測図

20 大寺廃寺は高麗氏の氏寺か

大寺廃寺は毛呂山丘陵の標高90～100mに位置し、礎石を伴う建物跡5棟と中世遺構1棟が調査されています。創建は復弁8葉軒丸瓦が、平城宮の瓦と類似することから8世紀前半と考えています。

遺物は鬼瓦おにがわら、軒丸瓦のきまるがわら、軒平瓦のきひらがわら、丸瓦まるがわら、平瓦ひらがわら、青銅製風鐸ふうたく、釘類くわい、埴塼はづたのほかさざまな須恵器が出土しており、瓦と須恵器の年代から8世紀前半から9世紀後半まで存続していたことが明らかになりました。中世の遺構からは15世紀の板碑が出土しています。

なお、女影廃寺は郡家の併設寺院、高岡廃寺が僧・勝楽の菩提寺が推定されていることから、大寺廃寺は高麗氏の氏寺として創建されたと考えられています。



図13 A地区建物跡



図14 大寺出土 鬼瓦

21 どうして3つもの寺院を 造営できたの

古代高麗郡には、女影廃寺、大寺廃寺、高岡廃寺の3寺院が建立されました。一つ郡で3寺院が建立された例は武蔵国内にはありません。古代に寺院を建立することは大事業だったと考えられ、瓦の生産、木材を切出して大きな建物を建築する技術、仏具や経典の入手・製作等、高度な技術を持った工人集団と経済力が必要でした。また、莫大な費用をかけて寺院を建立し、仏教に帰依しようとする高い精神性が窺えます。

高麗郡の出身である高麗福信は、3度にわたって武蔵国の国司に任ぜられ、他に2人の高麗出身者が武蔵の国司を務めています。単に武蔵国出身という理由だけでなく、中央で高い地位を得て武蔵国への影響力が大きかったからでしょう。この影響力を利用して、自身の出身地である高麗郡に3つの寺院を建立したと考えられます。

しかし、高麗郡は地形的に水田や耕作地が少なく、大きな利益を得るだけの特産品も少なかったようです。高麗郡出身の高麗福信や他の高麗人が中央で活躍できたのは政治力、経済力が備わっていたからです。経済力は高麗人からの援助だけではなく、高麗周辺の入間郡からも多大な支援を受けていたと考えられます。

坂戸周辺では、高麗建郡頃に新たに大きな集落がつけられました。建郡とともに現在の日高・飯能周辺に入植した高麗人と、坂戸周辺に居住した人びとがいた可能性があります。また、坂戸周辺は高麗川と越辺川に沿って広大な沖積地が広がり、古墳時代から穀類の生産性が高く、経済的に裕福だったようです。このような状況から、建郡当時から、高麗郡の開発に協力し、広大な沖積地で生産された穀類を提供し、高麗人の持っている高い技術力を活用して須恵器生産等の新たな産業を興すことにも協力したようです。

このように周辺地域からの支援があって、高麗人の中央での活躍や寺院の建立が可能だったのでしょう。

22 高岡窯跡で焼かれた瓦は どこで使われたの

埼玉県の須恵器生産は6世紀中葉から開始され、小規模でしかも操業期間も短いものでした。7世紀末から8世紀のはじめになると、寄居町北部の末野窯跡群、鳩山町・ときがわ町・嵐山町と広範囲に分布する南比企窯跡群が操業を開始します。そして、8世紀中葉になると入間市の加治丘陵に東金子窯跡群が築かれます。

日高市内の西部にも2か所の窯跡が確認されています。そのひとつの高岡窯跡は、昭和30年(1955年)に東京大学によって発掘調査が行なわれ、須恵器^{つぎわん}坏・碗・皿・甕、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土しました。この調査によって、高岡窯跡は9世紀後半に須恵器と瓦を焼いたことがわかりました。さらに、この窯で焼かれた軒丸瓦と同文の軒丸瓦が武蔵国分寺で出土していることから、武蔵国分寺との関連性が明らかになりました。



図15 調査風景



図16 出土した須恵器と瓦

23 移住者のむら堂ノ根遺跡

堂ノ根遺跡は飯能市大字芦刈場にある奈良時代の遺跡です。平成元年に行われた発掘調査で、この遺跡から一辺7mの大きな竪穴式住居跡が1軒見つかり、金色・白色の雲母を多量に含んだ須恵器の高台杯・蓋・甕が出土しました。

これらの須恵器は、胎土・整形の特徴から常陸国新治窯跡(茨城県土浦市)で作られた須恵器であることがわかりました。また、煮炊きを使う土師器の甕も常陸産のものでした。

これらの土器が8世紀初頭につくられたものであること、1軒の住居跡から食器と調理用具がセットで、しかもまとまった量が出土しており、高麗郡建郡以前に常陸国に住んでいた人びとが、そこで使っていた須恵器や土師器を携えて移住してきたことを裏付ける貴重な調査事例です。



図17 堂ノ根遺跡出土の常陸産土器[右の5点] (写真提供：飯能市教育委員会)

24 渡来人はどこから 開発をはじめたの

古代高麗郡の遺跡分布からを見ると、南小畔川、第二小畔川、小畔川、下小畔川などの小河川に沿って、建郡以降に遺跡が飛躍的に増えていることがわかります。このことから、今まで利用されていなかった谷津の開発を積極的に進め、水田化していった様子を読み取れます。

7世紀末から8世紀中葉まで続いた上猿ヶ谷戸遺跡と光山遺跡は、日高市と川越市またがる遺跡で、住居跡56軒、掘立柱建物跡40棟、井戸跡3基等が調査されています。両遺跡は高麗郡が建郡される直前に築かれた集落で、入間郡との境に位置するという特徴があり、小畔川の左岸に形成されています。

このことは、小河川沿いに開発を進めていったことを示す典型的な事例であるということが出来ます。



図18 高麗建郡直後の主な遺跡分布

25 渡来人は、税金をどうなったの

天武10年(681年)8月、日本に渡来した高句麗・百濟・新羅の人びとに対して、渡来してから10年の免税期間は終了したが、一緒に渡来した子供で課税される年齢(21歳)に達した者についても、同様に10年間の免税を認めるとい詔が出されました。その頃は、渡来人には田と種^{たね}が支給され、自給自足が^{うなが}促されていましたが、秋の田租納入前の8月に免税が拡大されていることから、この段階では課役(調・庸・雑徭)とともに田租も免除されていたのではないかと考えられます。その後、持統3年(689年)に施行された飛鳥浄御原令^{あすかきよみはらりょう}では、種^{たね}の支給は停止され、一般公民と同様に口分田^{くぶんでん}が支給されて、田租が徴収されました。ただし、外国人が帰化したときは10年間は課役を免除するという規定は、飛鳥浄御原令から大宝令、養老令へと引き継がれていきます。

霊龜3年(養老元年・717年)、課税対象者(課口)と非課税対象者(不課口)を分類して書き上げる大帳^{たいちょう}という公文書の書式が全国に頒布されました。大帳では「帰化」、つまり渡来してのち日本の公民となった者は不課口となっています。一般公民となってもなお渡来人は、「帰化」と称して別枠で把握されていたのです。

そして同年、令文に定められた渡来後10年間の課役免除は、百濟や高句麗からの難民については一生に延長されました。ただ、百濟や高句麗の滅亡からすでに50年近くたち、大人に連れられて渡来した子供でもすでに老齢に達していたから(渡来人でなくとも61歳以上は減税、66歳以上は無税)、この恩恵を蒙った渡来人は実際には少なかったと考えられます。養老への改元を前にしての政治的パフォーマンスだったのでしょうか。

26 渡来人が関わった郡は他にもあるの

高麗郡と同じように、律令政府が渡来人を集めて、新しく建てた郡としては、美濃国^{みしろだ}の席田郡(岐阜県本巣市ほか)、武蔵国^{しらぎ}の新羅郡(埼玉県新座市・志木市・和光市・朝霞市ほか)があります。席田郡は、霊龜元年(715年)に尾張国^{むしろだのきみ}の人で外従八位上の席田君^{にちか}近と新羅人74家を美濃国に移住させて建てられた郡です。天平宝字2年(758年)に席田郡の郡司の家の子らが、祖先^{から}は賀羅国^{からのみやこ}から帰化したという理由で賀羅造の姓を賜っていることから、席田郡は、のちに新羅国に併合された賀羅国からの渡来人が移住させられて建てられた郡だったことがわかります。

新羅郡は、天平宝字2年(758年)に、帰化した新羅人の僧32人、尼2人、男19人、女21人を武蔵国の未開発地に移住させて建てられた郡です。その後10世紀の初め頃までに新座郡^{にいくら}と改称されます。

建郡の過程はわからなくとも、新羅郡のように国名が郡名となっている郡は、その国からの渡来人が建設郡に関わっていた可能性の高い郡です。摂津国百濟郡(大阪市天王寺区ほか)は、来日していた百濟王族の余善光^{はくせんこう}が白村江の戦いの翌年の天智3年(664年)に難波に置かれて成立した郡です。百濟王氏の他に、この郡に居住したと見られる氏族がいずれも渡来系であることや、百濟国^{ぐんすりし}の軍守里寺に似た礎石をもつ寺院跡があることなど渡来人との関わり^{の深さ}がうかがわれます。

甲斐国^{こま}巨麻郡(山梨県韮崎市・南アルプス市ほか)も郡名「こま」の音が「高麗」と同じであることから高麗人の関与が考えられます。武蔵国高麗郡建郡にあたって甲斐国の高麗人も移住させられたことは、甲斐国の高麗人居住を示すもので、甲斐国の巨麻郡の建郡にも高麗人が関わっていたのではないかと考えられます。

和銅4年(711年)に建郡された上野国多胡郡(群馬県高崎市・藤岡市)も、郡内に韓級郷^{からしな}があり、建郡を称える多胡碑に新羅の製作技法が認められることから、渡来人^{たごのきし}(多胡吉志氏)の関与が考えられます。

27 本当に常陸や相模などから 移り住んだの

渡来系の人びとは関東周辺7か国(現在の千葉県・茨城県・栃木県・神奈川県西部・静岡県東部・山梨県)から移住してきたとされています。霊亀2年(716年)頃を境にして、日高市・飯能市内で遺跡が増加するのは、渡来人の移住によるものと考えられています。

そして、実際に人びとが移住した証拠も見つかっています。日高市常木久保遺跡(常陸国の土器が出土)・小河原遺跡(相模・下総国)、飯能市の堂ノ根遺跡(常陸国)・新堀遺跡(甲斐国)というように、他地域でつくられた土器がこの時期の遺跡から出土しているのです。

これらの土器は、移住してきた人びとがもともと住んでいた場所から持ってきたものと考えられています。

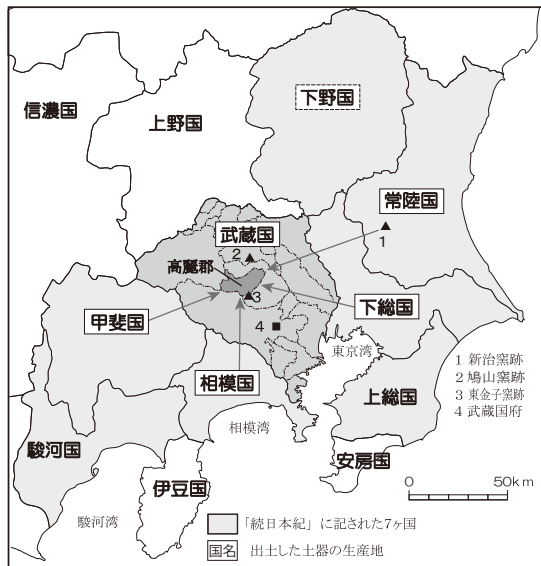


図19 「続日本紀」に記された7か国と
日高・飯能の遺跡から出土した土器の生産地

28 高麗郡の人は どんな生活をしていたの

東日本の奈良・平安時代の遺跡の発掘調査では、通常、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡が見つかります。普通の農民は奈良・平安時代になっても竪穴式(半地下式)の建物に住んでおり、掘立柱建物という平地式の建物は倉庫や納屋・作業場だったのではないかと考えられています。

日高市・飯能市周辺の発掘調査の結果では、県内の他の地域と変わった点は見られません。高麗郡が建郡された時点で渡来系の人びとはすでに二世・三世になっていたと考えられ、建物や使っていた道具からは特に大陸風といった痕跡は見いだせません。

住居跡から出土するのは、土器(須恵器・土師器)や石製品、金属製品等で、木や布等でできたものは腐ってしまって残っていません。土器は調理や貯蔵、食器として使われたものがほとんどですが、稀に須恵器でつくられた硯が出土し、文字を書ける人がいたことを示しています。また、南比企窯跡群(鳩山町)・東金子窯跡群(入間市)に近いせいか、須恵器の出土量がとても多いという特徴があります。ごく稀ですが、須恵器のいろいろな食器が1軒の住居跡から何十枚も出土することがあり、何らかの集会(宴・もてなし)を行ったと推定されるような事例もあります。

金属製品は主に鉄で、農具(鎌など)・工具(釘・斧・やり鉋等)、文房具(刀子)、糸紡ぎに使う紡錘車が多く出土し、絹や麻等の織物を織っていたと思われます。また、火打ち金や馬具・木工品の金具等も出土しています。小鍛冶遺構やフイゴ(送風管)の部品が見つかっており、村の中に鍛冶職人がいたことを示しています。

この他、日高市域では身分を表す帯具(ベルトのバックルや飾り)が多く出土しており、郡司などの郡の役人が住んでいたこともわかっています。

29 高麗神社はいつ頃できて、何を祭っているの

『日本書紀』によれば天智7年(668年)、朝鮮半島にあった高句麗は、唐と新羅の連合軍に攻められ滅亡しました。そのためこの2年前、高句麗から遣わされていた使節の一員であった若光は、帰国することができなくなってしまいました。

靈龜2年(716年)5月に、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の7か国に住んでいた高麗人(高句麗人)1799人を移住させて高麗郡が設置されました。大宝3年(703年)に「王(こきし・こにきし)」の姓を賜っていた高麗若光もこの地にやってきたと考えられます。

「高麗氏系図」によると若光が亡くなった際、靈廟(亡くなった人を祭るための建物)を建てて「高麗明神」と崇めました。これが高麗神社の始まりと考えられています。したがって高麗神社は、高麗若光を主な祭神とする8世紀にできた神社ということになります。

高麗明神は、その後若光の子孫である高麗氏によって守られて、14代一豊(長徳2年=996年没)の時に大宮号が許され、その後「高麗大宮明神」、「大宮大明神」、「白髭大明神」等と呼ばれました。23代麗純(建久10年=1199年没)が修験者になり、高麗氏は代々修験者として高麗明神に仕えました。



図20 高麗神社社殿

高麗若光を主祭神とするこの神社が「高麗神社」と称するのは、明治元年(1868年)に神仏分離令が出てからです。56代衍純は、神社を守るため「大記」と改名し神主となることを選んだのです。

30 聖天院ってどんな寺

高麗氏系図に記されている天平勝宝3年(751年)に僧・勝楽が亡くなり、その菩提のために聖雲(若光の子)と高麗氏三代目の弘仁が建立した寺院が高岡廃寺と考えられています。高岡廃寺は昭和51年(1976年)に発掘調査を行い、建物跡4棟、方形ピット遺構、石組遺構、特殊遺構などが検出され、8世紀中葉に創建され11世紀初頭まで続いていたことが明らかになりました。

この高岡廃寺は、現在の高麗山聖天院勝楽寺につながると考えられています。聖天院の境内には高麗王若光の墓も所在し、高麗王若光との深い関わりがうかがえます。



図21 聖天院山門



図22 高麗山号扁額

31 代表的な渡来人の姓はなに

漢字や漢文を読み書きできる渡来人は、代々文筆を世襲の職務として朝廷に仕え、史の姓を持っていました。史姓の制度は倭の五王時代(5世紀後半)には整えられていたと思われます。

史姓氏族の二大グループは東漢氏と西文氏でした。東漢氏は、応神天皇の時代に百済から渡来したとされる阿知使主を祖とし、大和国高市郡檜前郷(奈良県明日香村)が本拠地でした。西文氏は、応神天皇の時代に百済から渡来し『千字文』と『論語』を伝えたと言われる王仁を始祖とし、河内国古市郡古市郷(大阪府羽曳野市)が本拠地でした。

秦氏は、応神天皇の時代に百済から渡来した弓月君を始祖とし、養蚕・機織りの技術をもって朝廷に仕えたとされます。

欽明30年(570年)の夏、高句麗使節が越の国(今の福井県・石川県)に到着しました。敏達天皇は、高句麗使節が持参した国書を多くの史に読み解かせようとしたのですができず、船史の祖の王辰爾だけが読み解きました。

継体天皇の時代に中国から渡来してきた司馬達等を祖とする鞍作氏からは、法隆寺釈迦三尊像を製作した鞍作止利が出ました。

推古16年(608年)に小野妹子とともに隋に使わされた留学生・留学僧のなかに新漢人大国、新漢人日文(僧受)、新漢人広齊という名が見えます。新漢人は、もともと「新来(最近、渡来してきた)」という意味ですが、新しい国家体制確立に必要な知識・制度に精通した無名の渡来人たちの氏族名が固有名詞化したものと思われます。他に、高向玄理や南淵請安も大化改新に多大な貢献をしました。

32 高麗氏系図って、な～に

「高麗氏系図」とは、高麗神社が創られてからずっと神社を守ってきた高麗氏の家系図で、写真のように巻物になっています。高麗神社の歴史に関わりのあるとても貴重な記録であるため、日高市の有形文化財に指定されています。

もともとこの系図は、奈良時代から500年以上もの間、書き継がれていたものでした。ところが、28代目永純の時の、正元元年(1259年)11月8日に火事があり、高麗氏のふるさと高句麗より持って来た貴重な宝物や、古い記録などとともに燃えてなくなってしまったのです。

そこで、高麗氏の一族や古くからのことをよく知っている家臣、親戚などが集まって、いろいろな家に残っている記録を調べました。そして再編させたのが、現在残されている「高麗氏系図」です。

この系図は、その後代々の高麗家の人たちによって書き継がれていきました。ところが江戸時代になって、この系図は親戚であった勝呂氏(坂戸市の神主)が高麗姓を称するために預けられました。

この系図が勝呂氏より戻されたのは、明治7年(1874年)8月のことで、高麗家は56代の大記の時代になっていました。返還されたあと、空白になっていた47代から56代までの系譜が書き加えられ、さらに57代、58代についても記されました。この「高麗氏系図」は、今も大切に保管されています。

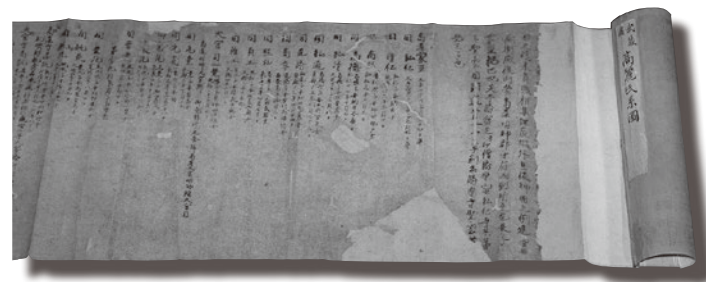


図23 「高麗氏系図」(写真提供：高麗神社)

33 高麗氏一族で活躍した人は

高麗王若光の子孫では、二十三代純秀が修験道の開祖役行者を信仰し、自らも修験者となります。二十七代豊純は、鎌倉幕府の御家人になりました。三十二代行高は建武4年(1337年)、新田義貞の鎌倉攻めに加わり勝利しました。しかし、観応2年(1351年)、足利尊氏とその弟の直義が争った観応の擾乱では、直義側について敗戦し、高麗氏は一時、廃絶の危機に陥りました。

高麗王若光とは別系統の高麗朝臣氏は、もとの姓は肖奈でした。顕慶5年(660年)、唐により高句麗の平壤城が陥落すると、肖奈福徳は日本に帰化し武蔵国の豪族となりました。福徳の子の肖奈公行文は養老・神亀(717~729年)の頃に明経博士(儒学の教科書を教える先生)として記録に見え、『万葉集』に歌が残されています。行文の子の肖奈公大山は天平19年(747年)、従兄弟の肖奈福信・弟の肖奈広山らとともに肖奈王の姓を与えられています。大山は、天平勝宝4年(752年)に遣唐使判官として唐に入国し、2年後、唐から帰国しました。天平宝字5年(761年)、遣渤海大使に任ぜられ、渤海使・王新福とともに渤海に赴きましたが、帰国の途中で病死しました。

天平勝宝2年(750年)正月、肖奈王福信・殿継ら6人が高麗朝臣の賜姓を天皇から授かりました。大山の子の高麗朝臣殿継は、宝亀8年(777年)5月、大学少允だった時、光仁天皇により遣渤海使に任命され、渤海使・張仙寿とともに渤海に赴きました。福信の子の高麗朝臣石麻呂は、宝龜9年(778年)2月に武蔵介として史料に見えます。

安蔵王の子孫だと主張した貊氏一族の貊宿禰家は平安時代の貊光季以降、雅楽(南都方楽人)を世襲しました。

34 朝鮮通信使って、なーに

朝鮮通信使とは、朝鮮国王が国書や贈物を届けるために日本(足利・豊臣・徳川の武家政権)へ派遣した外交使節団で、単に「通信使」と呼ばれることもあります。最初の通信使は室町時代に足利將軍に対して派遣されました。その後、豊臣秀吉の朝鮮出兵のために国交が断絶し、通信使も途絶えますが、江戸時代の慶長12年(1607年)に復活します。一般的に「朝鮮通信使」と呼ばれているのは、江戸時代の通信使のことです。

江戸時代の通信使は、主に將軍の代替わりにごとに祝賀のために派遣されました(合計12回)。通信使の派遣ルートは、漢城→釜山→対馬→杵岐→藍島→(瀬戸内海)→大阪→(淀川)→京都→(東海道)→江戸で、行列を組んでやって来ました。総勢300~500人という大行列で、その壮麗な様子が、『朝鮮通信使来朝図』や『朝鮮人來朝儀式同御登城之次第』(挿



図24「朝鮮人來朝儀式同御登城之次第」
(早稲田大学図書館 所蔵)

絵)などに描かれています。道中は派遣ルート上にある諸藩が護衛にあたり、移動や運搬のための船や人馬、および客館(宿泊施設)が諸大名から提供されました。客館は接待・饗応の場でありましたが、日朝両国の文化人による交流の場でもありました。

通信使は江戸に着くと吉日を選んで江戸城に上がり、城中大広間において聘礼の儀(礼物進呈の儀式)が行われ、朝鮮国王からの国書や贈物が進上されました。そのあと將軍からの慰労があり、徳川御三家による饗宴がなされました。

最後の通信使は、文化8年(1811年)に徳川家斉の將軍襲職慶賀のために派遣されたもので、両国の財政が悪化していたため、対馬で聘礼交換が行われただけで、江戸まで来ることはありませんでした。

35

どうして明治に高麗郡はなくなったの

慶応3年(1867年)10月に15代将軍の徳川慶喜とくがわよしのぶが大政奉還をし、その後旧幕府方と新政府方との戦争(戊辰戦争ぼしん)を経て、時代は明治へとかわっていきました。

明治新政府は、明治11年(1878年)7月22日に「郡区町村編制法」等の三つの法律を公布しました。これによって、中世以来廃絶していた行政区画としてしての「郡」が復活し、新たに郡役所が置かれ、それぞれの郡長と郡書記等が郡の行政事務を処理しました。この時、入間郡には48の町村で人口は15万人弱であったのに対し、高麗郡は15の町村で5万人弱ほどしかいませんでした。そのため、高麗郡は入間郡と合わせて一つの郡役所で事務をとることとなり、入間高麗郡役所が川越町に置かれました。

そして、明治23年(1890年)に「府県制」及び「郡制」が公布されると、郡は行政区から、府県と町村の中間に位置する地方公共団体となりました。郡には新たに議決機関である郡会及び郡参事会が設けられたのです。明治29年(1896年)8月1日に、高麗郡は入間郡と合併し、新たな郡の名前が「入間郡」となったため、高麗郡はなくなりました。入間郡とは、地形も似ていて住民の生活の様子もそれほど変わらないうえ、入間郡に比べると地域が狭く、人口も少なく、また郡の財政も乏しいため独立した地方自治体としての力は十分でない、というのが合併の理由でした。

奈良時代の霊亀2年(716年)に設置された高麗郡は、郡ができて1180年後、今から約120年前に姿を消したのです。

高麗郡関係略年表

西暦(和暦)	事項	備考
紀元前2世紀	高句麗建国	
4世紀末	倭国が百済・新羅を「臣民」とする	広開土王碑文
396年	高句麗、百済の都城(漢城)を陥落させる	
414年	高句麗広開土王碑が建てられる	広開土王碑文
427年	高句麗、平壤に都を遷す	
595年(推古3)	高句麗僧の慧慈が倭国に来る	日本書紀
605年(推古13)	高句麗王、倭国に黄金300両を贈る	日本書紀
610年(推古18)	高句麗僧の曇徴が倭国に紙・墨の製造技術を伝える	日本書紀
631年(舒明3)	百済王子豊璋、倭国の人質になる	日本書紀
660年(斉明6)	百済滅亡	
663年(天智2)	白村江の戦い	日本書紀
666年(天智5)	玄武若光、高句麗使節の副使として倭国に来る	日本書紀
668年(天智7)	高句麗滅亡	
この頃	高句麗遺民の肖奈福德(福信の祖父)が渡来する	続日本紀
687年(持統元)	渡来した高句麗遺民(56人)を常陸国に住まわせる	日本書紀
703年(大宝3)	高麗若光、高麗王の姓を賜る	続日本紀
716年(霊亀2)	武蔵国に高麗郡が建郡される	続日本紀
717年(養老元)	高句麗・百済よりの渡来人の課役を終身免除とする	続日本紀
この頃	高麗若光没し、霊廟が建てられる(高麗神社の創建)	高麗氏系図
748年(天平20)	若光の長子家重が没すと伝わる	高麗氏系図
750年(天平勝宝2)	肖奈王福信、高麗朝臣の姓を賜る	続日本紀
751年(天平勝宝3)	高麗氏の侍僧勝楽が没する	高麗氏系図
756年(天平勝宝8)	高麗朝臣福信、武蔵守となる(紫微少弼の兼官)	法隆寺献物帳
758年(天平宝字2)	武蔵国に新羅郡が建郡される	続日本紀
770年(宝亀元)	高麗朝臣福信、武蔵守に再任(造宮卿の兼官)	続日本紀
779年(宝亀10)	高麗朝臣を高倉朝臣と改姓	続日本紀
783年(延暦2)	高倉朝臣福信、武蔵守に再々任(弾正尹の兼官)	続日本紀
785年(延暦4)	高倉朝臣福信、武蔵守を辞任	続日本紀
789年(延暦8)	高倉朝臣福信、没す	続日本紀
1259年(正元元)	高麗神社火災により高麗氏系図焼失。再編される	高麗氏系図
1896年(明治29)	高麗郡がなくなる(入間郡と合併)	
2016年(平成28)	高麗郡が建てられてから1300年。記念事業	



執筆者紹介／項目担当者

赤木 隆幸(早稲田大学大学院生) 3・4・34

荒井 秀規(慶応義塾大学兼任講師) 7・8・10・12・25・26

尾崎 泰弘(飯能市郷土館) 29・32・35

柿沼 亮介(東京大学大学院生) 6・9・11

加藤 恭朗(坂戸市教育委員会) 21

須田 勉(高麗浪漫学会副会長・国士舘大学教授) 2

高橋 一夫(高麗浪漫学会会長・元埼玉県立歴史と民俗の博物館長) 00・16・18・19

富元久美子(飯能市教育委員会) 14・15・23・27・28

中野 高行(東京農業大学第三高等学校教諭) 1・5・31・33

中平 薫(日高市教育委員会) 13・17・20・22・24・30

—— 高麗郡建郡1300年記念事業 ——

「早わかり高麗郡入門Q&A」



■編集 高麗浪漫学会(編著)

■発行日 平成25年(2013年)11月22日初版1刷
平成26年(2014年)1月14日2刷

■発行者 高麗郡建郡1300年記念事業日高市実行委員会

〒350-1292 埼玉県日高市大字南平沢1020

日高市市民生活部産業振興課内

電話 042-989-2111(代)

高麗郡建郡1300年記念事業委員会

〒350-1243 埼玉県日高市新堀855-3

電話 042-978-7432



女影廃寺出土の軒丸瓦・軒平瓦

平成28年(2016年)は
高麗郡建郡1300年記念の年です!!

こまぐん 高麗郡

「郡」とはいくつかの町村をまとめた広い行政区画のことです。

江戸時代の末頃には、日高市・飯能市・鶴ヶ島市の全域と、狭山市・川越市・入間市・毛呂山町の一部を含んだ範囲を「高麗郡」と呼んでいました。